こだま秋まつり

マスク越しでも、子どもたちの笑顔は守りたい

伝統をつないでいくことは、まちの誇りをつくる

上町祭囃子（まつりばやし）保存会
寺田　博昭さん

一上町囃子保存会の寺田さんに、祭囃子保存会として伝統を紡いでいくうえで大切にしていることや、伝統を絶やさず伝えていくことの意義についてお話を伺いました。

一体感を大切に

「まずは子どもたちにお囃子をしっかりと覚えてもらい、当日は山車の上での演奏を楽しんでもらいたい。」そう語るのは上町祭囃子保存会の寺田さん。

祭囃子の練習については、リズムがとにかく大事であり、一つの楽器がずれてしまうと演奏そのものがバラバラになってしまうため、「大人も子どもも一番は、練習を楽しみながら一つのものを作り上げようとする一体感が大切」だと言います。

コロナ禍で消えた競演の舞台

練習に取り組む中でも、特に祭り当日に小学5、6年生によって行われる「競演」は、日々の練習の成果を発表する晴れの舞台。しかし今年はコロナ禍の影響で中止となってしまいました。

「お囃子の練習に関わってもらうためには、まずは楽しんで、良い思い出を作ってもらうことが大切だと考えています。」保存会としても、今年6年生の子どもたちのために、競演に代わるようなお披露目ができればと考えているそうです。

伝統と、まちの誇り

そうしてコロナ禍の影響を受けながらも、一丸となって伝統を紡いでいこうとする寺田さんたち保存会の方々。寺田さんは、保存会の活動について「素晴らしいことを行っているという自覚をもって活動している。」と言います。その誇りは、自らのまちの伝統を一体感を持って紡いでいく活動そのものに対するものであると感じました。

つまり、保存会の活動は伝承を通して、まちに住む人、ひいてはまちの誇りを創っているのではないでしょうか。

「お囃子の練習に参加することは、楽しさだけでなく関わることへの素晴らしさも感じることができる。この伝統が続いていってもらえるように、これからも活動していきたいです。」祭囃子の伝承を通じ、まちの誇りを紡いでいく寺田さんたちの姿に明るい未来が見えた気がしました。

子どもたちの笑顔は守りたい

令和４年度こだま秋まつり
連合青年会長
茂木　宏貴さん

一今年度のこだま秋まつり連合青年会長の茂木さんに、開催までの振り返りと、当日に向けての意気込みを伺いました。

コロナ前は、夏や秋の祭りをとおして、その年の四季を感じていましたが、コロナ禍で祭りのない期間は、四季の訪れもいつもより寂しかったように感じています。

また、伝統継承の側面からもコロナ禍で祭りを開催できなかった影響は大きいと思います。一度地域のつながりから離れてしまうと、元のコミュニティに戻って来ることは難しいため、祭りがない中でも年に数回お囃子（はやし）の練習等を行い、地域とのつながり、祭りとのつながりは絶やさないことを意識して行ってきました。

今回の祭りはコロナ前と同じ規模での開催までには至りませんが、一歩一歩着実に元の祭りの活気に戻していく、そのための準備段階にしたいと考えています。また、感染症対策を徹底したうえで、マスク越しにはなりますが、それでも子どもたちの笑顔を守っていければと考えています。